

## 開学40周年記念関係報告

# 式 次 第

司 式 宗教主任 三 枝 禮 三  
奏 楽 教 授 黒 川 武

奏 楽

讃 美 歌 2 3 4 A 一 同

聖 書 朗 読 司 式 者

出エジプト記 第33章12節～17節

フィリピの信徒の手紙 第3章12節～4章1節

祈 禱 司 式 者

式 辞 学長 塩 谷 饒

讃 美 歌 5 4 6 一 同

祝 禱 司 式 者

奏 楽

## 式 辞

学 長 塩 谷 饒

本学は今年をもって創立40周年を迎えましたが、本日ここに記念式典を挙げるに当たって、多数の来賓各位の臨席をたまわり、また同窓会の方々を始め常々本学の教育に多大な関心をもってご支援くださる皆さんがおいでになり、まことに有り難く、全教職員を代表して、あつくお礼申し上げます。

北星女子短期大学は、わが国において短大の制度が始めて暫定的に導入された翌年「1951」、早くも英文科開設により、54名の新入生を迎えてありますが、それは日本の女子の靈性を福音によって潔め、知的向上を図ることをライフワークと定めたクララ・スミス先生の意図に直結し、且入念な計画に基づく、タイムリーな決断の結果に他なりません。すなわち、当時はまず戦後そのものの社会情勢にあったと言うべく、女性の進歩が望まれながらも、これに対応する機関がみじかに不足していたのです。というわけで、本学は新たな女子高等教育機関の制度定着化推進グループに加わる榮をになったのであり、続いて1954年家政科が89名の新入生徒を受け入れて発足したときも、なおこれを裏書きするものと認められます。爾来、本短大はさまざまな試験に合い、きわめて困難な課題に接して試行錯誤を重ねて時を経たことは否定できません。しかし、その中にあって、徒に伝統の枠内に安住することなく、希望を持ち続け、時に国内外の流れに目を開き、また地域のニーズにも耳を傾けて奮闘した顛末は、本学25周年の記念事業の一環として編纂された「北星学園女子短期大学 25年歩み」に詳しく記されたところでありますので、私の賛言は省かせて頂きます。またその後の経過についても、1987年学園創立百周年事業の一企画たる北星学園百年史・通史〔昨年度発行〕の記すところではありますが、今日英文学科において英米文学・実践英語・英米文化・英語秘書の4コース〔総定員340名〕、生活教養学科において食文化・デザイン文化・経済教養・生活情報の4コース〔総定員500名〕を擁して現代に即応する学びやに成長し、同じ規模の短大にあって特色を明らかにする姿勢が見られるようになりました。

これはもとより、天地万物の創造主にして人類の歩みに目をとめたもう神

の導きを抜きにして有り得ないことと確信する次第ですが、順次学長職を務められたエバンス・安孫子・時任・手島・留岡・木村諸先生の卓見と手腕、またこれをバックアップして来られた歴任教職員、さらにわが短大をさまざまな角度から支えてこられた学園内外の方々の存在が与かっていることも深く心に止めたいと思います。また本学の先輩に当たる大学・短大のご指導と助言、さらに後から仲間になられた短大からの新鮮な企画の提示と的を外さぬ問い掛けも感謝して忘れることはありません。

さて、時の経過を記念する行事は、わが国の法人や諸々の機関では10年単位の幅で計画されることが多いようですが、試みに例を欧米に求めれば、五の倍数をもとにした大きなスパンをもって区切り、その歴史的遺産の重みと現代への関わりを心に刻む契機にするのが普通であります。政治上の画期的大事件として、米国建国やフランス革命200年の記念が盛大に行なわれたこと、また個人としても後世に多大な影響を与えたルターの生誕500年あるいはモーツァルト死後200年に際し、諸々の記念事業が企画されたことは記憶になお鮮やかに残るところです。それらと同次元の問題ではないにしろ、1987年に執り行なわれた北星学園全体を挙げての創基百年式典と関連事業は、教育界においては確かに注目すべき事象に数えられるものでありました。ところで、わが短大は上述のごとく創立4半世紀でこれを行なっており、30年の節目には見送っております。そこで今年が40年に当たることが話題になった時に、学園の一部局と言われる短大が、10年幅の流れに従って独自に40周年記念の企画を提示すべきか、思い切って50年の時点でしかるべき計画を実行すべきか議論が分かれました。しかし、50周年においては、25年の行事を経験した短大教職員の数は微々たることが予想され、一方では、新世紀に入って直ちに訪れる短大50年を望めば、整理し処理すべき課題の数も多々あり、その前段階としての40周年を考えるなら、積極的な意味が見出されると言う結論に落ち着いたようなわけであります。なおこの機会に、合わせて建学の精神その原点から問い直すことを忘れなければ、一段と価値が加わると判断され、ここにこのような形で式典を挙行することになったことをご報告いたします。

終わりに臨み、ご多忙をおしてご出席された皆様がたに重ねて御礼申し上げます。

## 祝 賀 会 次 第

司 会 事務局長 安 田 順 助

開 会 の 辞

司 会 者

挨 拶

開学40周年記念行事実行委員長 黒 川 武

祝 辞

日本私立短期大学協会北海道支部長 竹 田 淳 照 殿  
札幌大谷短期大学

旧職員代表 高 久 眞 一 殿

〃 高 杉 直 幹 殿

北星学園女子短期大学同窓会長 高 谷 尚 子 殿

乾 杯

前学校法人北星学園理事長 時 任 正 夫 殿

祝 宴

挨 拶

学 長 塩 谷 饒

閉 会 の 辞

司 会 者



## 祝 辞

日本私立短期大学協会北海道支部長

札幌大谷短期大学長 竹 田 淳 照

先程来のご挨拶にもありましたように、40年をお迎えになりましたことを心からお慶び申し上げます。40年前にこの短大ができましたのは、まさしく、その前年にはじめて日本の学校制度のなかで短期大学制度というものが発足した、その翌年でございます。全国的に見ましても、あるいは、北海道から見ましても、正に、先駆者として短大教育制度の上で私達を導いて頂いたわけでございまして、感謝に耐えないところでございます。

北海道には、今、30の短期大学がございます。そのうち、4校は国公立でありまして、私立が26校ございますが、その26校の短大のいつでも先頭に立って、短大とはかくあるべきものであるということをお示しになって来て頂いたわけでございます。

しかし、40年経ちまして、この短期大学制度は、いまや2年ないし3年の短期の高等教育機関としては、世界に冠たる完成度を持った学校制度だと言われるようになりました。どこに持ち出しても恥じることのない学校制度を短期大学という名のもとに作り上げてきたと、外国の人たちも言っております。しかし、40年経ちまして色々な点で改革しなくてはならないことも多くなっております。特に、今年は、4年制大学短期大学ともにその設置基準が大幅に変わりまして、ある意味では、革命的な変革を余儀無くされるというような状態になっております。こういう中で、明日からの短期大学がどのように歩んでいったならば、この立派な短期大学制度というものをさらによりよく出来るかということについて、先駆者であるこの北星学園女子短期大学のお導きをいままです以上をお願い申し上げたいと思っております。一言お祝いの言葉にかえさせていただきます。

## 祝 辞

旧職員代表 高 久 眞 一

開学40年記念の集りにお招きを受けまして有難うございました。なつかしい方々や卒業生の皆さんに久しぶりにお会い出来、共に語らい、本学の御発展を目のあたりできましたことは大いなる喜びでございます。心からお祝い申し上げたいと存じます。

私がアメリカ留学を終えて本短期大学に務め始めたのは、開学数年後の1953年秋のことでありました。北星女学校時代の寄宿舎の一階が短大校舎のすべてであった様に思います。何しろ、英文科しかありませんし、各学年40名ぐらいで、全学と言っても百名にも満たなかったのですから。私が駒ヶ嶺先生と一緒に割り当てられた研究室は昼なお暗く、裸電球が天井から下げてあり、特異な匂いが木肌にしみついた部屋で、今では札幌中探しても何処にも無い様な代物でした。しかし、当時の日本の状況からすれば、すべてがその程度の貧しさの中にあった訳で、まあこんなものだろうぐらいに考えておりました。

女子の短期大学というものが制度的に発足したばかりの頃ですから、一般社会から広く理解と支持を得るといふ訳にも行かず、年によっては英文科の入学生が40名を大きく割ることもあり、存続が危ぶまれ、経営的に北星学園の中学や高校の大きな負担になっているのではと肩身の狭い思いを抱いたことさえありました。しかし、女子学生が4年制大学に進むというのは当時は極くまれで、優秀な女学生は4年制よりか短大を選ぶ場合が多いという時代でしたから、学生には誇りがあり、勉学意欲は旺盛で、私にとっては大いにやり甲斐を感じさせてくれる職場でありました。

山田基男先生の低音での英講読、アメリカ仕込みの碓井あや先生のクラス、それに北大から吉田竜男先生、高橋保郎先生、川村米一先生が非常勤として見えておられ、英文科の授業は結構充実していた様に思います。

着任後数年で家政科が増設され、新たに校舎も増築され、足どりも段々しっかりして来た様でした。永田勝彦先生が来られたのはその時でして、暗い研究室から、少しはましな研究室に移り、永田先生と御一緒したこともその頃

のことです。

札幌地区の短大や大学に英語弁論大会を年に一度やってはいかがと訴え、英文科の学生が推進力となって、それを主催し、本女子短大の学生が上位をさらってしまうという快挙を成しとげたのも楽しい思い出です。その時のことを私が英文の手紙でアメリカの長老派教会伝道局に報告したのですが、その中で「ダビデがゴリアテを打ち負ました」という比喩を使ったのを覚えています。それ程に、規模が小さく一見非力な女子短大であったのです。

やがて、ドロシー・テイラー先生の『ジュリアス・シーザー』のクラス、中川治子先生のオーラルによる英講読が加わり、英文科の学生はさながらアメリカ留学を経験しているようなものでした。山田先生も碓井先生も英語によるコミュニケーションはお手のものでしたし、アメリカ人の来訪があっても慌てることはなく、却って活気づいて、学内は英語で沸くといった感じでした。

そのまま落着いて本短大につながるものが出来なかったのは何とも残念なことで、着任から7年ぐらいで学園の大学創設の仕事にたずさわることになり、1961年には実質的に授業から離れてしまいました。

昔とは比較にもならない、すべてが完備された校舎を今日拝見し、内的にも大いに充実している様をうかがい、よちよち歩きの頃の歴史に参画した一人として、学生集めに全道くまなく歩かれた山田基男先生の御苦勞を知る一人として、隔世の感と、まぶしさと嬉しさと誇りとを覚えるものです。



## 特 別 講 演 会

司会 宗教主任 三 枝 禮 三

開 会 挨 拶

学長 塩 谷 饒

講 師 紹 介

司 会 者

演 題 「現代における神の問題」

——神論と多神論のはざまにて——

尚絅女学院短期大学学長

文学博士  
神学博士

小 川 圭 治 先生

## 現代における神の問題

— 神論と多神論のはざまにて —

尚絅女学院短期大学  
学 長 小川 圭治

### はじめに

伝統ある北星学園女子短期大学の40周年の記念のおめでたい会合にお招きを頂きましたことを大変光栄に存じております。

御紹介頂きましたように4月から私も女子短期大学にかかわる者の一人としてお仲間入りさせて頂きましたので、心からのお祝いを申し上げたいと考えて、ついウカウカとこの大切な講演を引き受けてしまいました。しかし、このプログラムなどをお送り頂いた頃から大変後悔をしております、この大役には相応しくない、ネームバリューも何もない人間でありますので、お引受けしないほうがよかったのではないかと考えはじめました。しかし、もうちらしなども出来上って今更お断わりするわけにも参りませんので、勇気を鼓舞して、今日は皆様の前に伺った次第です。

お引受けした以上、何かしら内容のあることを申し上げなければならないと思いますと、内容が難しくなってしまいます。私は哲学・宗教学・神学の領域で勉強して参りましたので、ましてや、神について、見えない神について語るわけですから、話は当然抽象的にならざるをえないと思います。それで、多少ともお分かりやすくするためにお手元にございますレジメを作成致しました。しかし、4ページになってしまいました。

学生諸君は、これだけの話を聞くのは大変だと思って、恐れを抱いていらっしゃる方もあると思うのですが、今から1時間10分位の時間を頂きたいと考えていますが、ぜがひでもこれを全部語り尽くしてしまうという野心を持っているわけではございません。全体の事柄のたたづまいはこういうことであることを示すために書きました。その中から、重点的なところをおさえながら、お話ししたいと思っているわけです。最近になりましてから、三枝先生とご相談しましたときに、学生諸君が大勢出席されると伺いましたので、それならば、単なる宗教学・神学的な論理だけじゃなくて、イラストレーション

に今もちょっと御紹介頂きました遠藤周作の作品を使いましょうかと申しました。三枝先生もご承知のような文学的な牧師でいらっしゃるから御賛成頂きまして、レジメのようなかたちで、それをイラストレーションに使うことに致しました。遠藤周作の作品論をむしろ副題にしたほうが、諸君にとって親しみがもてたのではないかと思うのですけれども、そういうことでお話しを申し上げたいと思います。ただ、私は、今も御紹介頂きましたように、3月まではまだ1人の教員でございました。そして、学生諸君と遠藤周作の『海と毒薬』などを読んで、ホットな議論をするということが私にとって一番たのしいことでもあり、また、多少は自信のある得意な領域なのです。そういう生活が私にとってまだ一番向いておりまして、学長というのは準備もなく就任してまだ6ヶ月であらゆる意味でふさわしくないお役目です。

ですから、どうぞ、学長さんが話に來たというのではなくて、諸君が、小さなクラスと一緒に討論しておられる先生方と同じような一人の教員が、ここで講義のつもりで喋っている、というふうに気楽にお聞き頂きたいと思います。

それから、前置きとしてもう1つだけ申し上げておきたいことがございます。先程も御紹介頂きました私の先生のカール・バルトは、晩年70才をすぎましてから、一切講演というものをやめてしまいました。その理由が、あのブッシュの『バルト伝』にも書かれています。それには、歳を取ったということもないわけではない、しかしながら、これは1960年代のことですけれども、現代の新しい世代は、じっと座って長い時間講演を聞くということは不得手なのだというのです。

第一、講演者が一つの思想的な図式を作り上げて、たとえば、ここで、私は、神概念の5つの類型という話をしようと思っておりますが、そういう図式をある一人の人間が作り上げて、そして、200人なり300人の人達全部の頭にそういう図式をがっちりはめこんで、1時間にも渡って右にも左にもひきずりまわすというのは、これは、はなはだ独裁者的やり方であって、そういうやり方は、キリスト教的でも、また現代的でもないと申しまして、講演をやめてしまいました。そのかわり、その会に行く前に、その会合に出る人達から質問状を送ってもらって、その質問状に対する答えを彼は準備して、対話の形で進める、晩年の10年近くはそういう形でしかやらなくなってしまいました。ですから、私も本当はここでこれから下に降りて行きまして、学生

諸君と対話をする、その前には『海と毒薬』は読んで来て頂く、少なくともほとんど筋書き通りのビデオがございますから、それくらいは見ておいて頂くというやり方にしたいのです。しかし準備の点でそうはいきませんので、せめて、大学の教師として一番理解しておりますことは、講義で喋っているというのは、案外気が紛れて時間が早く経つのですね。ところが、他の先生の講演を聞きに行きますと、聞くというのも大変疲れることだということがわかります。私自身もそのことを自覚しておりますので、50分位経ったところで5分休憩させて頂いて、そして、最後の結論は、もう一度フレッシュな気持ちでこちらも話す、皆さん方も聞いて下さるという形にさせて頂きたいと存じます。

いろいろ申し上げましたが、以上を前置きとして本論に入りたいと思います。だいたいはこのレジメの筋道で申し上げたいと思いますので、ご覧になりながらお聞き下さい。

## (1) 神について

今日お話ししたいと思いますのは、表題に掲げましたとおり、「現代における神の問題」でございます。こんにち、世界は、グローバル・ワールドといわれまして、一体化がすすんでおります。ですから、日本の問題は日本だけで片づかないのですけれども、しかし、今日お話ししたいことは、そういう全世界のことではなくて、この日本の、そして私達の問題であります。こんにちのわたしたちが、一人の日本人として、神の問題をどう考えているか、またどう考えるべきか、ということを御一緒に考えたいと思うのです。そのために、このレジメのローマ数字の(I)というところで申し上げたいと思いましたが、「神について」、私達を取り巻く環境をも含めて一体どういう状況の中に我々はおかれているか、そのことを御一緒に確認しておきたいということでもあります。

### 1. 無神論の時代—神の不在から神の死へ—

第1のポイントは、私達は「無神論の時代」に生きているということです。この中で、本当に神を信じているという方は何人位いらっしゃるでしょうか。本当は手を挙げて頂くといいのですが、きっとそんなに大勢ではないと思います。神は信じていない、つまり無神論に近い立場の方が多いに違いないと



思うのですが、思想史の流れの中でも、現代を表す特徴として、現代のキッチフレーズは「無神論」だと言った学者も少なくありません。無神論の時代、神の不在から神の死の時代に動いて来ているということは、もうすでに言われはじめて式、参百年経っております。この無神論という言葉は、塩谷学長も言語学者でいらっしゃいますので学生諸君はそういうお話をお聞きになるチャンスが多かったのではないかと思います。atheism（無神論）は、つまりtheos（神）というギリシャ語がaという否定接頭字をつけられて、否定されて出来ていることばです。ですから、もともとこのことばは、たとえば、あの有名なソクラテスがアテネの裁判に訴えられました時に、（これはソクラテス自身がその訴えのことばをまとめた部分に出てくるのですが）、ソクラテス自身がatheos（無神論者）だと言われるわけです。というのは、神さまを信じていないのではなくて、本当の神を信じようとするために、それまでの伝統的なギリシャの神々を否定するから無神論者だといわれたわけです。この言葉は、思想史のなかでは、最初このような形で登場して参りました。ですから、キリスト教の歴史の中でも最初に「無神論」ということばが出て来ますのは、ローマ帝国による迫害のためにコロセウムに引き出された初代のキリスト者たちに対してです。

その人たちはギリシャ・ローマの伝統的神々を認めないから無神論者だと言われたのです。キリスト教史の中で、「無神論」ということばは、最初はこのようにキリスト者自身に対していわれたのです。ところが、こんにちの意味で、つまり神様を信じていないという意味で用いられるようになりましたのは、17・18世紀になってからです。特に一番最初に「無神論」という言葉がヨーロッパで公式の文書に出てきましたのは、啓蒙主義的な理性主義の神学に対して、プロテスタントの正統主義の神学がこの神学を批判をして、あの人たちの立場は無神論だと言ったときだと言われております。つまり批判の対象としてまず用いられた。しかし、こんにちのように「私は無神論である」という言い方が最初になされたのは、ヨーロッパの思想史では、フランスの啓蒙主義の思想家であるP. T. ドルバックだと言われています。この人が、1770年に、『自然の体系』という書物を書きました。そこではじめてあからさまに無神論という主張がなされたと言われています。その「無神論」と対応して、「神の死」というテーマがはじめてヨーロッパの思想史の中で現れて来ましたのは、ジャン・パウルというドイツの小説家の書きま



した幻想小説『ジーベンケース』だといわれています。これが書かれたのは、1796年から1797年にかけて、つまり18世紀もほとんど終わりです。その『ジーベンケース』の中で死せるキリストが宇宙をめぐる後、この世界を見下ろして、「神はいない (Daß kein Gott sei)」という言葉を読むという一章があります。これが初めて神の死ということが思想史上のテーマとして提起された場所だといわれています。

それを受けまして、哲学者のヘーゲルも、やはり、神の死と真剣に取り組む、「思弁的な聖金曜日」、つまり、あのキリストの十字架の出来事、それが哲学的な意味を持つということ論じはじめました。これまで日本の哲学者はヘーゲルのこういう問題については余り注意を払いませんでしたが、近頃は、ヘーゲル学者がこの問題をよく取り上げるようになりました。その問題をいわば下敷きにして、皆さんもよくご承知のフリドリッヒ・ニーチェが「神は死んだ」と言いました。『反時代的考察』とか『ツアラトゥーストラ』というような書物、これらは19世紀の終わりに出た本であります。戦後、1945年以降になりますと、フランスの思想家ジャン＝ポール・サルトルが、「私は無神論的実存主義者だ」と申しました。また、その後、ドイツのフランクフルト学派のエルンスト・ブロッホという人が、『キリスト教における無神論』という本を書いたりしています。このように見て参りますと、やはり18世紀の終わりのころから19世紀、20世紀にかけて無神論ということばが、時代を捕らえるキャッチフレーズになったということがお分かり頂けたかと思います。

## 2. 今日の日本の精神状況

このことを背景にして、それでは日本の状況はどうでしょうか。日本の場合にも多くの人々は、神または宗教には無関心だということに違いないと思います。評論家の亀井勝一郎は、かつて、「日本には無神論者は一人もいない。一億二千万の無関心論者がいるばかりだ」という有名なことばをのこしました。少なくとも無関心な方が多いに違いないと思います。はっきりした神信仰を持つ有神論者もいないけれども、明確な無神論者もないというのが、私達を取り巻く状況だと言えらると思います。文化庁の『宗教年鑑』などを見ますと、既成教団（明確な宗教の形態をとって教団組織を形成している教団）への参加は、急速に減少しています。まともな教団体制をもっている宗教ほど、若い人が関心をもたなくなっている。最近、アメリカのシカゴ学派の宗

哲学者たちは、古い宗教概念では、この事態はとらえられないと主張して、新しい概念規定を提起しました。T. ルックマンという人は、「見えない宗教」(invisible religion) という概念を用います。つまり、形の上では宗教だと思われなくても宗教であるようなもの、たとえばすごいロック・コンサートに何千人あるいは、万を数える若者が集まって熱狂的に踊り狂うという場合、だいたい宗教には踊りがつきものでありまして、この場合には非常に宗教的になる。ジョン・レノンという人は、T.M. (超越的瞑想) という宗教に入っていたのですね。そういうイベントは宗教性をもってきておりまして、それをとらえるため「見えない宗教」という概念を作りました。あるいは、ロバート・N・ベラーは「市民宗教」(civil religion) というあたらしい概念でアメリカの市民生活そのものの中にある宗教性をとらえるという提案をしています。

このような視点から日本の場合を考えてみますと、ある意識調査によりますと、日本人の62パーセントは特定の宗教には何の関心ももたないという結果が出ています。これは、私達の常識と合致するのですが、それじゃ、日本人の60パーセント以上は無神論者かという、そこはそう簡単でないのです。「無神論者か」という問いを言い変えてみまして、「人間と自然とを越えた何か霊的な存在は信じますか」という問いを出しますと、60パーセントの人が「ある」と答えるのですね。この人たちは無神論とは言えないのです。特にその年令別の統計が出ておりまして、おもしろいのですが、一番しっかりと無神論だというのは50歳代でありまして、50パーセント位は「信じない」と答えるのですね。こういう方は、選挙の際には、社会党か、未だに、共産党に投票する方なのかも知れません。この人たちの中には、案外ちゃんとした無神論者がいらっしゃるのです。しかし、20歳代では70パーセントの人が、何か超越的なものはある、と答えている。このような動向を背景にしまして、テレビでもいろんな霊的存在ですとか、霊能者が現れるのですね。そういう番組が多くなりますし、映画でもオカルト映画が盛んになるのは当然だと思います。つまり新しい世代は、非常に神話的な世代だといわなければならぬと思います。この世代には、一部の聖書学者たちが言いますように「非神話化」しましたらかえって話しは通じなくなるのでありまして、神話的な話しの方にノスタルジーを感じるという世代が出て来たのです。

こういう動向を反映いたしまして、日本には、ご承知のとおり新宗教ブー

ムというのが出て参りました。第1次新宗教ブームと言われているのは、江戸末期でありまして、おかげまいり、というおどりながらお伊勢さんに参ったという雰囲気为背景として、天理教（1833年）、金光教（1856年）などが成立し、江戸末期に第1次新宗教ブームが起りました。

第2次新宗教ブームは昭和期に入ってからでありまして、創価学会が1937年（昭和12年）です。立正佼成会はその次の年、その他という形でこれらの宗教は、あの戦争中の軍部その他による厳しい弾圧にも耐え抜きまして、戦後目覚ましいブームを迎えます。踊る宗教というのからはじまりまして、真光教とかいった沢山の宗教が出てきました。

ところが、この10年来、宗教学者は、第3次宗教ブームが来たと言っています。この新宗教の特徴は、レジメにもちょっと書いておきましたが、ミニ教団でして、小さなものは3人とか、5人とかという信徒が一人の優しいおじ様とかいうような教祖の周りに集まって、そのおじ様は何でも私たちの悩みも一生懸命聞いてくれる人だとか、そういう宗教が形成されています。私の属します日本キリスト教団もその1つなのでありますが、こういう教団が第3次宗教ブームのあおりを受けまして、教勢が伸び悩んでいます。ところが新宗教はつぎつぎに成立して行きまして現在、文化庁宗務課に届けられている教団の数は20万教団に達したということです。20万人の信者がいるというわけではありません、教団の数が20万であるということです。

こういう状況を迎えているわけでありまして。しかもその中で、皆さん方が今まで卒業してこられました小学校・中学・高校までの教育は、日本では非常にネガティブな徹底したトレランス、信教の自由が貫徹されておりまして、その教育課程の中には、いかなる宗教教育も一切組み入れないという徹底した啓蒙主義的理性主義の才能教育が行われて来ました。ですから、皆さん方は、その教育を忠実に受けていらっしゃると、宗教についての批判能力も、神様というものを見分ける能力もないわけです。

そして青春期の色々な精神の動揺、悩みを背負いながら、諸君はこの20万教団の渦巻く社会に出て行かなくてはならない。しかも宗教の中にはいいものもあるのですが、たとえば、アメリカのピープルズ・テンプルのように集団服毒自殺をすとか、日本にも小さな教団で女性信徒たちが服毒自殺をしたのがありました。そういう反文化的、反人間的な宗教と、それから歴史の中で本当の文化を生み出し人間を支えてきた宗教とを見分ける判断を初等中



等教育の中では一切教えないということでもあります。最近では、オウム真理教とか幸福の科学というものもどう判断したらよいか、そういうことについて、日本では基本的には公立学校では一切教育を行って来ていない。こういう状況の中にありまして、私は、日本人にとっては、神様を整理してみる必要があるのではないかと考えまして、レジメのその次に掲げました神概念の5つの類型というものを作ってみました。横軸に多神論と一神論をとり、縦軸に有神論と無神論を置きます。すでに述べましたようにこの縦軸に示される状況の中から出てくる問題意識もしっかりと押さえなければなりませんけれども、それだけでは片はつかない、やはり一神論と多神論という横軸も必要ではないかと考えます。この横軸にひとつのものをさし（定規）のようなものを作りたいと思ったわけでもあります。今、私の前に提示されている神様は、この中でどのあたりに位置するのか、という形で考えて頂く一つの基準のつもりなのであります。

### 3. 中村・梅原対談

この一神論と多神論の問題を考えます場合に、その問題の難しさを示す話をひとつここで付け加えさせて頂きたいと思います。それは、昨年（1997年）の1月の朝日新聞「新春対談」で仏教学者の中村元先生と私の先輩であります梅原猛さんが対談をしていました。梅原さんの論点は、レジメにあげました『中央公論』の論文で、同じ内容を繰り返しておられます。

梅原論の内容は、簡単に申しますと、こういうことです。一神論の社会は他の神を信ずる社会に対して、非常に非寛容、攻撃的で、他の神々を征服しようとする。つまり、戦争に適した宗教だ。一神論文化、キリスト教文化は自然に対しても非常に征服的だ。日本古来の森の文明を破壊して行ったのは、こういう西洋的な一神論文化である。だから、今必要なのは和の宗教であって、一神論を捨てて多神論に戻りましょう、という提案なのです。

それに対して、中村元先生は、確かに真の絶対は対立を越えるということですから、対立ばかりしているのは真の絶対ではないです、といって賛成していらっしゃるのですが、よく読みますと、それでは大急ぎで多神論に戻りましょうとは、必ずしも言っていないらしいのです。けれども、もっぱら梅原さんの論が先行している感じの座談会でありました。

しかし、この梅原説の多神論・一神論図式に対しましては、2月に入りま

してから、同じ朝日新聞で、加藤周一氏が『夕陽妄語』で大変適切に反論しておられました。それによりますと、そこには、確かに梅原説が指摘する面もあるけれども、逆に多神論民族も結構好戦的じゃないだろうか、古代ギリシャも多神論だったけれども、スパルタとかマケドニアというのは大変好戦的な国だったし、ローマでも、多神論の蒙古でも、さらには現代にきて、ルター派信仰よりは古代ゲルマン神話の方がいいといったヒットラー・ドイツも凄く残忍な攻撃的な人達ではなかったか。多神論がこの神もあの神も良いというのは、自分の体系内のことであって、自分の体系とは違う体系の神に対しては、逆に非常に攻撃的であったと言える。だから一神論から多神論へというような言い方は、日本の社会にだけ住んでいると何かそこに論拠があって、説得力のある提案のように聞こえるかも知れないけれど、世界的な視野に立つと、そうは、簡単には言えないのではないか。そういった世界的視野と日本国内的視野のギャップというようなことが、現代の社会の中にいろいろと出てくると思う。たとえば貿易摩擦などである。

こういう議論で適切に反論しておられました。ですから、これから遠藤周作の作品を通じて、御一緒に考えてみたいと思います、この神の問題を取り上げるにあたりまして、多神論・一神論という図式だけでは解決しない面がある。そこには有神論と無神論という縦の軸も考えていかなければならない。

しかし、ここでは先ずは、多神論・一神論という横軸に沿って神概念を五つ設定するということから出発してみたいと思います。

## (II) 神概念の五類型

レジメの(II)の「神概念の五類型」というところをお開き頂きまして、右側にその内容説明がありますので、後で、ゆっくりご覧頂きたいと思います。ここでは、要点だけを辿りたいと思います。最初、私は、A, B, C三類型で考えておりました。普通の宗教学で多神論・一神論の横軸の図式だけで考えますとA, B, C三類型で片づくのであります。

### 1. A 型

Aというのはあらゆる人間の尊崇の対象全てですから、特別な力を持っているものは全部入ってくるわけです。嵐とか雷雨とか稲妻とか天災とか、雨、風そういったものも神様になりました。これは日本神話でも、ギリシャ神話



でも同じであります。あるいは、もっと未開な時期の宗教や現代の未開民族の宗教の中にもそういったものがあります。

## 2. B 型

B型は、Aの中で形をもったものであります。ですからその図の右の方のカッコの中はAマイナスBと読んで頂きたいのですが、Aのなかから形のあるものを引いた(A-B)が一番純粋なA型ということになります。Bのなかには、自然の中の形態をもったもの全てを含むのでありますから、いわゆる呪物崇拜、アニミズムとかフエティシズムとか言われるような神々も入りますし、ギリシャその他の神話にも出てきますように植物が神様になったり(植物型論)、いろいろな動物が神になったり(動物型論)、動物と人間とがまじったりする。そういう混合形というのも出てきたり、いろんな神様がありますが、これをB型に入れます。B型の中で人格をもったものとそうじゃないものとを分けまして、人格をもったものをCとして設定しますと、(B-C)というのが純粋なB型になります。

## 3. C 型

C型の中には、日本神話やギリシャ神話の沢山の神々が全部そこに入ってくるわけであります。私は、最初はこの三つの段階で考えておりましたのですが、講義をしておりますうちに、これでは足らなくなりまして、唯一なる神というのをどう名付けたら良いかと思ひまして、ウルトラCの神と名付けました。

数年前に関東地方で放映されました放送大学のテレビの「現代における人間観・世界観」というシリーズで、『神からみた人間観と世界観』という講義を担当しました。その時に、この図式を説明して、ウルトラCの神というのを作りましたら、放送大学にはスクーリングがありまして、単位を取るためにレポートを書かなくてはならない。その頃は筑波大学にいましたが、私の助手が採点の手伝いにまいりまして、宗教のレポートを見るとみんなウルトラCの神という答えを書いた、というのです。私は、あまり変な概念を流行らせるといけないと責任を感じておりましたのですが、そのうちに、単なる絶対的一神論ではだめで、今日の話の中心になりますような、許しの神を考えなくてはならない。それをどうしようかと考えておりましたら、ちょ

うどその頃、オリンピック体操競技種目の中で、ウルトラDというのが出てきましたので、しばらくは、ウルトラDの神でやっていたのですけれども、あまり奇をてらってもとおもいまして、その後、ABC'C'D'ではなくABCDEというふうに五つに致しました。

しかし、そうしますと、宗教学者たちからは、ABCは確かに宗教現象学的で分かるけれども、DとかEとかいうのは、それは小川さんのバルト神学に基づく信仰告白ではないか、学問的には異質なものがくっついている、という批判を受けたりしました。

それはしかし、もし、私がABCだけの宗教現象学の範囲に留まりましたら、先程申し上げましたような、現代の日本の渦巻く20万教団の神々の中で、反人間的反文化的な、否定さるべき宗教または神と、それから人間を本当に支えるような本当の宗教というものの区別・判断は付かないわけです。ピープルズ・テンプルも一つの宗教であるというところにとどまらなければなりません。対象が神であり宗教である以上、この区別・判断というのは、非常に本質的なものだとは思いますが。そう考えておりましたら、レジメの有神論・無神論と多神論・一神論の十字の図の上に書いておきました規範的な(normative) 批判的宗教現象学(critical phenomenology of religion) という、パウル・ティリッヒの『組織神学』の中のことばをみつけまして、私は、その方法で行きたいと考えました。

このように考えて行きますと、一番重要なポイントは何かと申しますと、それは結局C型はD型に進まなくてはならないということなのです。つまり、C型では人格神が沢山ありまして、多神論はいいのですけれども、その多神論ではどうしても神々との闘争が出て参ります。これは、ギリシャ神話でもまさにそのとおりです。そして、最後に最高主宰神というのが出てきます。それは、ギリシャではディオス、ラテン語にしますとデウスになります。日本神話でもおなじで最後には「天御中主命(あめのみなかぬしのみこと)」という最高主宰神を設定しなくてはならなくなります。

つまり、神というものは、たとえあらゆるものが神になったとしても、やはり、崇拜の対象となる特別なものでなくてはならない。たとえば、先程の植物型論で非常に特別な木とか植物があって、それを神だとして崇拜する場合でも、しかし、神という以上は単なる植物じゃないわけです。あるいは、動物、ミトラ教がヘビを神様にする。ヘビは恐ろしい動物ですけれども、

単に恐ろしいヘビというだけではない特別なヘビでなければならない。その「特別な」ということを押し進めて行きますと、どうしても最高の絶対的主宰神になって行かなければならないのです。これを私は、絶対的超越性という概念で表したいと思うのですが、神である以上絶対的超越性への傾斜（傾き）というものを果たさざるを得ない。従って、C型の神々の世界でおおぜいの神がなごやかにやすらっているように見えるけれども、梅原説ではそういうことでしたが、実際には、その中では激烈な神々の闘争が戦われて、ついには、神々のたそがれが到来するという話もあります。

そして、最後に最高主宰神が出てくる。あるいはそこに至る前にも、多神論の最終段階は二神論でありまして、ペルシャのゾロアスター教その他の二神論が出てくるわけです。しかし、その二神論でも必ず片一方が光の神なら片一方は闇の神であり、片一方が善神だと片一方は悪神というふうに、数学の記号で申しますと、プラスの記号とマイナスの記号の神様がありますから、どうしたって、プラスの光の神、善の神の方がいいに違いないのです。それをもっと強調しますと最高主宰神になるわけです。C型はD型へと向かわざるをえないというのが、私のこの図式の中に組み込まれている解釈であります。

#### 4. D 型

それじゃD型はただひたすら超越していたらそれでいいのかと申しますと、レジメの2ページ目の真ん中あたりをご覧くださいなのですが、一神論にもディレンマがある。はじめにもちょっとご紹介しましたエルンスト・ブロッホという現代のフランクフルト学派の哲学者の言い方でいいますと、ただひたすら超越する神は、「人間がそこに立ち現われる余地のない高み」の神であって、人間の世界を脱出するあいだは、ちょうどロケットが地球の引力圏を脱出する時はすごい抵抗を受けますから、その時には超越への力が強く出るのですが、ある程度はなれてしまいますと、もう今度は月の引力にゆっくり引かれてそっちへいくということで、超越する力は必要なくなるわけですね。つまり、人間の世界（地球）とは全く無関係になってしまう。その場合には超越性ということばの意味が失われてしまいます。むしろ、このただひたすら超越するだけの神、ただ絶対性に安住する超越者、典型的な一神論の神は、真の絶対者ではない、ということでもあります。



この点は先の中村元先生の言葉と一致するわけです。こういう典型的な一神論は、私達はユダヤ教とか、あるいはイスラム教の中に見ることが出来ると思います。こういう場合のユダヤ教は、非常に動きのとれない律法主義になって行きますし、イスラム教は、非常に自由の失われた絶対主義に進んで行きます。昨年もちょうどこのあたりの講義をしておりましたら、湾岸戦争がおきましたので、サダム・フセイン氏はなぜあんなに頑固であるか、それは宗教学から見るとよくわかると説明したことがございました。その時、私は、キリスト教は、だから一神論ではないと言いましたら、ある立派な哲学者の先生が「えー」という大きな声をあげてびっくりされたので、今度は、私の方がびっくり致しました。キリスト教は一神論だというのが梅原説の理解でありました。

私は、キリスト教をイスラム教またはユダヤ教から区別しなければならぬとするならば、神学的に申しますと、旧約聖書だけでなく、新約聖書に立つキリスト教は、排他的一神論ではないという面を大いに強調する必要がありますと考えるわけであります。そういうことで、真の絶対的超越神は、D型にも安住できなくて、E型が設定されなくてはならないのです。

## 5. E 型

このE型の神は、超越者でありながら、人間の世界に向こうからやってこられる、到来する神です。ドイツ語でコンメン (Kommen) ということが最近、ドイツの神学で大変強調されるのですが、コンメンの神が大切なのです。そして私達は、死と復活によって自分を啓示する父、子、聖霊の三一論の神、それがキリスト教の神なのだということを、はっきり確認する必要がありますと思うわけであります。

真の神は、神の側からこちらに到来する神なのです。仏教でも、初期の戒律的仏教から、自力本願の荒行を行う山岳仏教を越えて、浄土教、さらに浄土真宗というふうに救済論的になってきますと、仏様が来迎されるのです。そして、仏教にも三身論が成立します。法身・化身・応身ということばです。仏教もそのように救済論的になってくると、仏様はお一人では足らなくなつて、三身論になったり四身論になったりするということがございます。この問題には今日は深く立ち入ることはできませんが、D型の仏はE型の仏へと展開せざるを得ないということが、仏教においてもいえるわけです。

この図の中からも、そのことを読みとることができると思うのです。そういうことを背景にいたしまして、現代のわれわれが、現代の神々を整理して行く時に、ユダヤ教やイスラム教とは、はっきり区別されたキリスト教の神をしっかりとらえなければならない。そのためには、CからDへの対立を越えたDからEへの対立を明確にとらえる必要があると思うわけです。

### (Ⅲ) 遠藤周作における神の問題

そのことを今日は(Ⅲ)以下におきまして、遠藤周作を手掛かりにして考えてみたいと思います。ここには遠藤周作のおもな作品の展開を図式にしてみました。ここに上げましたものを全部取り上げるわけではありません。主として『白い人』と『海と毒薬』を中心にお話ししてみたいと思います。お疲れかと思いますが、最初の出発点の『白い人』までやって、ちょっと5分位休ませて頂こうかと思います。

遠藤周作は、カトリックの立場の作家ですが、その作品の中に非常にはっきりした形で、神概念の展開があると思います。しかし、作家はそういうことをこのように絵解きの図式にしないで、作品の中にうまく包み込んで表現しているのに、哲学者か神学者が出てきて、怪しげな図式を作って説明することはなほだ迷惑であると遠藤さんはおっしゃるのではないかとと思います。私もかつて、軽井沢のある同じ敷地内で三年の夏を遠藤さんと隣あわせですごしたことがありました。「狐狸庵」とか称せられて遠藤さんが「〇〇先生が脳溢血で亡くなった」と言うんで黒服に着替えてすっとなでいったら、その先生がお酒を飲んでピンピンしていたというふうな話が続々あります。この不真面目さは、ユーモア小説風の間小説にも出て来ますが、それは主要作品の中で余りにまじめに神のことを取扱いすぎるからだという説もあります。

#### 1. 多神論と一神論

この遠藤周作さんが、最初に学生の時代に書かれました評論が、レジメにも挙げました最初の『神々と神と』という小さな評論であります。この評論は『四季』という雑誌（これは3期に分かれて発展しましたので、『四季』の第3期というべきだと思うのですが、戦中・戦後にかけては堀辰雄氏が主催した雑誌になったわけですが）、そこに発表した小評論であります。そ



の後、この評論は『カトリック作家の問題』という単行本にも収録されましたが、そこでは、遠藤さんはこの二元論図式をすっかり崩してしまっていて、さらにもとは「H. N. 様」あての書簡体の評論になっておりましたが、それもとっちゃうという仕方です。全く違った文章になりました。私たちはそれを初出で読まなければ、ここで申し上げる図式ははっきりしないのです。

このH. N. というのは、私は最初は素敵な女性だと思っておりましたが、先程御紹介頂きました私のゼミの熱心な学生が10年くらい前に探してくれました。光塩女子高というカトリックの学校が東京にはございますが、この学生は、その卒業生でしたので、その学校付属の教会に所属していた野村英雄という若くして亡くなった、やはり『四季』派の詩人ではないかと言ってきました。軽井沢の旧堀辰雄宅で、多恵夫人に『野村英雄詩集』を見せていただいて、そこでこの詩を見つけました。遠藤氏は、『花嫁の冠は』という詩集のなかにある『瞬く星』というのを引用しながら、野村英雄宛の文章として書いているのです。

この野村英雄はフランシス・ジャムというカトリック詩人の詩を訳すことによって、洗礼を受けるに至った人です。そして、この『瞬く星』という詩は、夜更けに鳩時計の音に目覚めてみると、閉ざされた窓から暗闇と永遠のなかで『瞬く星』と対話する、というような美しい詩であります。この『瞬く星』は、野村英雄氏にとっては、マリヤ様であり、キリスト様であるわけですが、そのころの遠藤周作はそこまでいけない。そして、一方にリルケの『ドゥイノのエレジー』を置き、他方に堀辰雄をおく。リルケも決して単なる一神論ではなくて、汎神論なんだけれども、どこかにキリスト教的一神論が残っている。逆に堀辰雄もドイツやフランスの詩を訳したり、ヨーロッパの文学に造詣が深くてヨーロッパ的に思考しているにもかかわらず、どこかに日本的な多神論の匂いが残っていて、そして、晩年の『花あしび』の東洋的なあきらめの世界への逃避が結論となった。

遠藤氏自身は、そのどちらにも安住することができなくて、中間に立っている。野村英雄は、星と会話ができて、本当に羨ましい、とこういう内容の評論であります。先程も、三枝先生が紹介でおっしゃったように、『神々と神』というのは、まさに多神論と一神論の対比です。遠藤周作の文学の出発点が、この多神論と一神論であり、彼自身はその中間に立って問題を問いつづけたということを、まずここで確認できると思います。そして、そのテー

マを受けて、最初に彼の小説家としての本格的な出発点となりましたのが、今日ちょっと立ち入って話してみたいと思います『白い人』であります。

## 2. 日本人と西洋人

この『白い人』は、1955年（昭和30年）の5月に近代文学に発表され、7月には芥川賞を受けました。11月には『群像』に、それとペアになる連作『黄色い人』が発表されました。この『白い人』の題材となりましたのは、1942年ナチ占領下のフランスのリオンで実際に起こった事件であります。

私は、1987年5月朝日新聞をボンヤリ見ておりますと4年前に南米のボリビアでクラウス・バルビー、当時「リオンの虐殺者」といわれたナチの親衛隊隊長が捕らえられて、その裁判が行われる。一番のポイントは、当時のレジスタンス評議会の最初の議長であったジャン・ムーランが、リオンの郊外の秘密の場所で捕らえられ、獄中で死ぬけれども、それが自殺であったのか他殺であったのか、であるという記事を読みました。そして、このバルビーは、リオンの町で2万以上のユダヤ人やレジスタンスを捕らえ、そのうち、4千人以上が処刑または強制収容所のガス室で命を落としたとその新聞に書いてありました。

遠藤さんもそのことには一言も触れませんし、30年以上経ってから、この記事を書いている朝日新聞の記者も『白い人』を読んでいないらしく、ひとことも触れていませんでしたが、私は、どうも、これがモデルだというふうに考えました。この小説の主人公は、「私」という一人称で登場して、名前は出てきません。従って、小説全体が一人称の主観小説の形をとっています。この「私」は、おそらくバルビーの手下になったナチ協力者（コラボラトゥール）の一人であると考えられます。そして、残忍な拷問・虐殺の実行者になったわけです。遠藤さんは、この「私」が虐殺者になるまでの体験を五つの段階に分けて描いています。

これは、後に『海と毒薬』の戸田という主人公の体験が五段階になると対比していますので、ちょっと辿っておきたいと思います。この「私」という主人公の第一次体験は、少年時代、女中さんのイボンヌの白いふとももの下に押さえつけられた老犬を見て、非常にサディスティックな加虐に目覚めたということです。第二次体験は、「私」がリセ（いまの中学・高校でしょうか）卒業前にお父さんと旅行をした時アデンの町で起こります。アラビアの

アデンというところは、遠藤周作の『アデンまで』という小説では、白色人種と有色人種の地理的境界線と考えられているところです。そこで、アラビア人の曲芸師の娘と弟のアクロバットな曲芸を見ます。その弟を抑えつけているほとんど全裸に近い娘の目に、ショーというものを越えた残忍な光りを見て戦慄を覚えるというのが、第二次体験です。

第三次体験は、このアクロバットの少年と「私」が、熱風に焼けただれた枯れ草の中にどぎつい原色のままころがっている岩石の陰で、二人だけでもった秘密のひとつときというふうな表現の体験をします。

第四次体験は、大学時代です。神学生でレジスタンスの活動家であるジャック（これは殺されたジャン・ムーランがモデルか、あるいはその仲間の一人と考えていいと思いますが）彼が、守ってやろうと思っていた遠縁の女子学生マリー・テレーズを、「私」は、そのことを知っていながら、大学の舞踏会の夜に誘惑し墮落させる。これが第四次体験です。第五次体験は、バルビーの命令によってジャックの拷問を行うこの「私」は、ジャックに最大の屈辱を味わわせるために、その目前でマリー・テレーズを凌辱する。ジャックはそのために舌を噛んで自殺をし、マリー・テレーズは狂気の世界へ転落していくという体験であります。

この小説に出てくるのは、「裏切り」のテーマでありまして、これから遠藤周作の小説はずっと「裏切り」のテーマが尾を引いて来ます。永藤武という青山学院の日本文学の先生の論文によりますと、この裏切りのテーマの裏には遠藤さん自身のお母さんへの裏切りがあるという論証があって、私もこの論証に殆ど賛成ですが、まだ、御本人が存命中ですからこれはプライバシーの問題で、これ以上立ち入ることは出来ないテーマです。

ここには、東洋的なものと違った非常に強烈な罪の意識が描かれています。この罪の意識は、レジメに書いておきましたが、アウグスチヌがキリスト教の罪を規定しましたことばを借りますと「意志の倒錯」(perversio voluntatis)であります。それに対して、キリスト教に外の消極的な罪意識は「善の欠如」(privatio boni)ということになります。この「私」という『白い人』の主人公の行動は「聖書の福音書を逆に読む」という表現が出てくるのですが、キリストのユダに対する愛の構造から、愛する者の裏切りというのが人間にとって、神にとってすら、もっとも苦しい事であるとすれば、マリー・テレーズをジャックの面前で裏切らせることがジャックにとってもっとも深



い苦痛であるというふうに、「聖書を逆に読む」というところがあります。

これは一つの倒錯の意識、倒錯の罪ということであります。『白い人』のこのテーマは、やがてその次の『黄色い人』にも受けつがれまして、そこでは千葉という主人公は、同じような裏切りの構図で、糸子という女性を特攻隊に志願したその婚約者から奪い取って誘惑する。

それに対して『白い人』として裏切り者の神父のデュランが登場するのですが、この人は、そういう日本人の罪意識の不在の状況と、キリスト教的な罪意識の状況との間をいわば、揺れ動く存在として登場して参ります。いずれにしても、『白い人』と『黄色い人』におきましては、このような形で消極的な罪の意識、あるいは、罪意識の不在ということと、意志の倒錯という徹底した罪の自覚とが、対比されて出て参ります。つまり、あの『神々と神』に出てきました多神論と一神論の対比が、人間の実存というものを軸にしまして、罪意識の不在と積極的な罪意識という形で転回する。

これが、レジメの図に示しました『白い人』以下のテーマであると思うのです。（少ししゃべりすぎましたけれども、それでは、3分間位休憩させて頂きまして、最後の結論を話させて頂こうと思います。）

### 3. 恥意識と罪意識

つまり、私たちはこういう形でここまで述べてきたつもりでございます。つまり、神を考えるにあたっては、一神論と多神論という横軸は、やっぱり重要である。この軸上で考えて行かなくてはならないけれども、その背後にある有神論と無神論という縦軸についても、考慮を払う必要があるということから出発いたしました。そして、この5種類の図式は、初めにも申しましたとおり、ものさしでありまして、皆様方が神という名前で出合われるであろうあらゆるものはこの中の位置付けることが可能です。だから、この神様は大体あのあたりの神様なんだなぁ、というように見取図にも使って頂けるといいます。遠藤周作の作品は、まさに、このような多神論と一神論の対立から出発しました。しかし、その図式だけではダメだということが、あの梅原さんの考え方に対する加藤周一氏の批判にも現れていた。しかし、遠藤周作は、1. では、ほとんど梅原説と同じ対立次元で出発致します。そして、英雄主義あるいは実存というものを軸に置きまして、神様が多いか少ないか多か一かだけでは、結論は付かないことがこの段階ではっきりしてきたのであ



ります。

そこで神の問題を人間自身の実存または、主体における罪の意識という次元で考えようというのが次の段階であります。この罪意識と対立して、今度は恥意識という概念が出てくるのですが、この二つの意識の対立で考えるというのが、遠藤文学の問題の次の展開であると思います。それが、遠藤文学の最初の代表作と考えられる『海と毒薬』に出て来るのです。多神論と一神論の対立が、ここで、恥意識と罪意識の対立になると申しましたが、この恥と罪という対立概念は、あそこ有名になってよく読まれました、ルース・ベネディクトの『菊と刀』の中にある「恥の文化」と「罪の文化」という文化人類学的類型論が背景になっています。この小説の題材となりましたのは、戦争末期アメリカのB29爆撃機が撃墜され、パラシュートで降下して捕虜となったアメリカ人飛行士たちを生態解剖にした事件であります。戦後、横浜のアメリカ軍の軍事法廷でそれが裁かれましたけれども、軍事裁判でありましたために、あまりジャーナリズムにも報道されず、横浜方面の地方版には少し載るというくらいでありました。

ところが、この『海と毒薬』が出ましてからは、にわかに有名になり、当時の関係者や遺族のところにも、ジャーナリズムの追求があって、関係者もいよいよ口を噤むようになり、裸の事実そのものを掴むことが逆に難しくなっています。ルポライターの上坂冬子さんが中公文庫に『生態解剖』というルポを書かれまして、その中にそのような経緯がよく辿られていて、現在わかる限りでの事実がまとめられております。しかし、事件は確かに、この小説のモデルですけれども、小説はどこまでも小説、創作として読まなければならないと思います。

この小説の主な登場人物は三人だと思います。九大医学部第1外科橋本教授のもとにいる二人のインターンの医学生、戸田と勝呂、看護婦の上田ノブというこの三人が差し当たっての登場人物であります。戸田はあの『黄色い人』の千葉に結びつく登場人物で、日本的な罪意識を持つ典型的な人物であります。しかし、勝呂は、戸田ほど割り切ることが出来ません。その中間に揺れ動いているデュランのテーマが日本人に受けつがれたといえるかと思います。しかも勝呂は、この小説の続編と考えられます、レジメの次のページのところにも書いておきました『悲しみの歌』の主人公です。遠藤周作は、そこで勝呂のその後、晩年を扱っております。『海と毒薬』の主人公は、ま

ずは、戸田だと言えると思います。この戸田がこういう意識を持ちながら、生態解剖に係わっていくプロセスを、遠藤周作は五つの体験の段階で描いています。これは、さきほどの『白い人』で主人公の『私』が白い人つまり西洋キリスト教社会の人間としてもっている罪の意識が五段階で展開されましたが、それとの対比で、この五段階を辿ってみたいと思います。この五つの体験は、きっちりと小学校・中学・旧制高校・大学・卒業後のインターン生というふうに、学校の段階になっていて、ちょっと図式的ではないかと少し気になるところです。

まず第一次体験は、六甲小学校の上級生の時、戸田は子供なのにすでに無意識のうちに、大人たちに気にいられる術を覚えていた。病氣の木村君は夏休みの宿題が出来なかったので、彼に昆虫の標本をあげようとして持って行くという作文を書くのですが、その作文の終わりに、「しかし、その途中でちょっぴり惜しくなった」と自分の気持ちを書きそえます。そうすると、先生は、この作文をみんなの前で読ませて、「この作文のいいところはどこ分かるか」と生徒たちに尋ねるわけですね。それは、この「ちょっぴり惜しくなった」という自分の気持ちを正直に書いているところがいいのだ、と先生は言うわけです。しかし、戸田にとっては、その作文を書く時に、そのことはちゃんと計算に入っていたわけですね。そのことを、賢そうな東京からの転校生若林君に見破られ、その彼の顔に皮肉な笑いが浮かぶのを見て、戸田は屈辱感はこのこったが、心の呵責は感じなかったというのです。

第二次体験は、N中学とありますが、これは、灘中学、今の灘高です。博物の先生が大切にしている珍しい蝶の標本を彼は盗み出して、サディスティックな快感を感じながら、羽をちぎって溝に捨ててしまいます。折しも、ちょうど標本室にいた気の弱い、成績もよくない山口という少年が疑われ、先生から追求を受けますが、彼は罪を全部山口になすりつけて、そのままにしてしまいます。つまり、「他人の目さえ誤魔化せれば、それで良い」「何ら良心の呵責は感じない」と言うのです。

第三次体験は、旧制高校、浪速高校のとき、夏休みに従姉のところ泊まりに行き、このお姉さんと姦通事件を起こします。それに対しても、「後ろめたさ・不安・自己嫌悪はあった。しかし、自分が破廉恥漢だとも、裏切り者だとも思わなかった」「無感覚だった」と言います。

第四次体験は、九大医学部の学生になって、戦争中ですので、遠縁の娘さ

んがお手伝いさんに来て下さる。その人を妊娠させてしまいます。大学で習ったばかりの子宮ゾンデを使って手術をしますが、それがうまくいかなくて、彼女は身体の具合が悪くなり、田舎の実家へ帰ってしまうという事件です。それにつきましても、「醜悪だとは思ったが苦痛感はなかった。むしろ、ホットした」、「その無感動な自分が不気味に思えた」と言います。

第五次体験が、小説のテーマであります生態解剖へのインターン学生としての参加であります。そこで行われましたことは、アメリカ人の捕虜を軍事医学・戦時医学のためということで、ふつうの肺切除の手順で麻酔を掛け胸を開き、そして、肺を何分の1まで残したら人間は生きられるか、という実験です。あるいは、食塩水を血液の代わりに何分の1まで入れても人間は生きられるかという実験です。手術の手順は全く普通の手術と同じでしたが、普通の手術が命を救うために行われるのに対して、ここでは、いつ死ぬかという「死」が目標となった生態解剖でした。この解剖が終わりましてから、戸田は、小説のほとんど終わりの方で、同僚の勝呂（この人は気が弱くて、結局途中で気分が悪くなって逃げ出すような人なのですが、）と二人で大学病院の屋上へ登って玄界灘から博多湾へ押し寄せる夜の海の波を二人で見つめるシーンがあります。戸田は、「自分にとっては、世間の目、世間の罰だけが問題なのだ」、「自分には、そもそも良心の呵責というのがないのだ」と言います。つまり、戸田は代表的な日本人の恥の意識、世間にとってどうなるかということだけが全てであるわけです。絶対的な超越神が、そのまなざしで見つめているということではなくて、世間の目さえ通れば、世間への義理さえ済んだらそれだけでまかりとおってしまう。つまり近頃のことは「みそぎさえ済んだら」というのでしょうか、節操も法律違反も汚職も何でもゆるされてしまうという考え方です。

そういう罪の意識と、他方の超越的な神の前における西洋的な罪の意識というものの違いが、ここに非常に明確な形で出て来ていると思います。そのことを、レジメの図に表示しました。戸田と、それから今日は取上げられませんでした。上田看護婦という日本人の意識と、橋本ヒルダという教授夫人はドイツ人ですので、この人の意識との対比が行われています。このように恥の意識と罪の意識を対比しただけで、あるいは、世間の目と超越者のまなざしを対比しただけでは、救いはどこにあるのかは答えられません。この小説では残念ながら、答えは提示されておられません。それは、続編『悲しみの



歌』をまたなければならないのでしょうか、しかし、私はここで救いは提示はされていないが、暗示はされていると思います。それが、一つは、海のイメージという形で出てまいります。この小説の中で、海のイメージは、私が数えますところでは18回出てきています。海鳴りを入れてでありますが、非常に重要なシーンで出て来ます。しかも、この海の色が最初は青い色をしています。それがやがて「暗い海」になって、「黒い海」になって、そして「黒ずんだ海」になります。ところが、最後の病院の屋上のシーンで白く光っている海が出て参ります。二回出て来るのですが、まず「だが、戸田は、勝呂がそこだけ白く光っている海をじっと見つめているのに気がついた」とあります。それからすこし先に行きまして、「一人屋上に残って勝呂は白く光っている海を見つめていた」というのです。

私は、白という色は、遠藤周作にとっては罪の許しを象徴する色だと考えています。彼が『キリスト教文学の世界』に収録しましたジュリアン・グリーンの小説『モイラ』についての評論の中で、「罪の女モイラが死んでしまい、その死体の上に白く降り積もる雪が、全てのどす黒い罪を許し、雪よりも白く清めた」と書いています。『女の一生』その他でも、白い雪が、救済のシンボルに使われている場合が何回かあります。だから、こういう形で、白く光る海という形で、答えとしての罪の許しを暗示しておいて、そして19年の後に書きます続編の『悲しみの歌』の中で、罪の中に捕らえられてしまった勝呂が許されるということを、描いているのだと私は考えます。

そして、このような、神に対する裏切りの罪の許しというものが、私は、（もう今日は立ち入ってお話する時間はございませんが）その次の『沈黙』の中に出て来ると思います。踏み絵を最後に踏もうとするロドリゴに対して、「その足の痛さは私が一番知っている。だから踏むが良い」と、こういう深い許しのことばが語られます。これは救済者の到来であり、この到来する救済者が、現代のイエス像という形で『死海のほとり』以下の作品に展開され、それを基礎に致しまして、先程申しました『悲しみの歌』における勝呂の罪の許しを書けたのだと思うのです。

（レジメの4. 5. 6はその道筋を示したつもりです）。後半は少し、はしょってしまいましたが、以上が遠藤周作の作品における神の問題の展開のあらましです。



#### (IV) むすび

このように、作家遠藤周作は、あの梅原さんの主張にもありました「多神論と一神論」「東洋と西洋」「日本人と西欧キリスト者」という対比から出発しました。しかし『沈黙』あたりからは、この二元論図式では問題が少しも進展しないことに気づいて、自分の絶対的超越性の中に閉じこもる排他的一神論の神ではなく、逆に神の側から、自ら神であることを捨てて人間となり、苦しんでいる、弱い、孤独な人間の傍に立ち、決定的な瞬間に同伴者として共に歩み給うイエス像に到達したのです。それは、先程の神の五類型論でいえば、D型からE型への転換であります。真の神は、弱い人間の罪に満ちた世界へと、自ら到来する神なのです。このことをもっとも端的に示しているのは、ピリピ書2：6-11のキリスト讃歌です。ゆっくりと、意味をたどりながら読んでみましょう。ここに提示されているのは、人間となり、十字架上の苦難の死をとげて、三日目に復活し、いまま生きて人間と共にいます神であります。

私の先生であるカール・バルトは、『教会教義学』の『和解論』に、注目すべき言葉を書きのこしました。この言葉は、『和解論』の全体をひとことで言いあらわしたのですが、同時に彼の神学の全体の中核を示す言葉でもあります。それは、「人間の神喪失はありうるが、和解の言葉によれば、神の人間喪失はありえない」というのです。その意味をパラフレーズするとこうなります。

人間は、遠藤周作の小説にも出てきたように、さまざまな形で神に反逆し、その敵となり、さらに神の存在を無視して無神論者になります。人間はつねに神喪失症に陥るのです。ところが神は、聖書が語る和解の福音によれば、イエス・キリストが御自身の受肉と死と復活とにおいて示されたとおり、絶対的超越者としてただ人間と世界を超絶する狭い一神論の神ではなく、多神論と一神論の出口のない対立を突破して悲しむ者をなぐさめ、苦しむ者を助け、反逆する者を愛し、孤独な者の同伴者となる神なのです。この神は、たとい人間が、反逆者、敵、無神論者となり、神喪失症になったとしても、神御自身の方は、その本質からいって人間喪失症にはなり給わないということなのです。ここでは神は、父、子、聖霊の三位格の神です。この三一神論の神は、三であることによって、一神論の根本モチーフであった神の絶対的

超越性を、狭く片寄った排他的・一神論の枠を突破して貫徹していますから、C型の多神論への逆行ではありません。そうではなく、真の神が真の絶対的超越性を示されたのです。

私は、遠藤周作がその作品において示そうとした神も、このような人間と共にあるインマヌエル神だと思うのです。長い間、御静聴有難う存じました。

# 「現代における神の問題——神論と多神論のはざまにて——」

(担当：小川圭治)

北星学園女子短期大学

開学40周年記念特別講演会 1991.11.2

## (I) 神について

1. 無神論の時代 — 神の不在から神の死へ

2. 今日の日本の精神状況

第三次新宗教ブーム、ミニ教団の成立、20万教団

日本の初等・中等教育における宗教教育

3. 中村 — 梅原対談

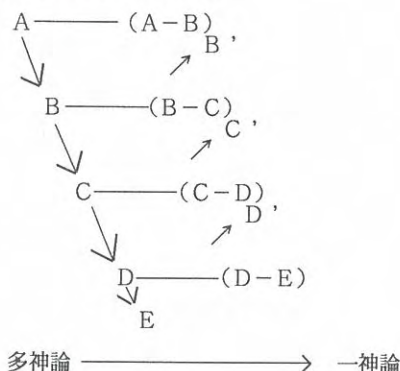
梅原猛「一神論から多神論へ」『中央公論』1990, 2月号

梅原猛＋中村元 「新春対談」朝日新聞1990. 1. 8, 16. (朝刊)

加藤周一「日米内外—危険を生む常識の較差」

朝日新聞1990. 2. 8 (夕刊)

## (II) 神概念の五類型



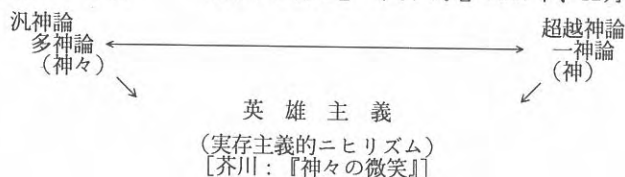
規範的・批判的宗教現象学



1. A型・・・人間の尊崇の対象となる力あるものすべて。  
(A-B)型・・・形なく、ただ力があるもの。Dynamistic、呪力神
2. B型・・・A型の中で、形態をもつものすべて。  
(B-C)型・・・非人格的な、物、動物などの形態をとったものすべて。  
animistic、呪力神、phytomorphism (植物型論)、  
theromorphism (動物型論)  
B'型・・・呪力神、人格神に反発して、存在、知性、数などの抽象概念を  
神とする。自然哲学などの神。
3. C型・・・B型の中で、人格として現れてくるものすべて。  
(C-D)型・・・人格をもつ多神論の神々。anthropomorphism (人型論)  
C'型・・・一神論の狭さと抽象性に反発して、神秘主義の神概念から、マ  
リア崇拜、聖人崇拜など多神論的崇拜対象がうまれる。
4. D型・・・最高主宰神としての独一神。monotheistic, 独一神。  
(D-E)型・・・ただひたすら超越する神。henotheistic, 唯一神。  
一神論のディレンマ  
E.Blochの批判：「そこに人間が立ち現れる余地のない高み」と  
しての神。真の絶対が、真に絶対となることによって、相対者の自  
己絶対化が根本的に克服され、相対が真に現実的な相対となる。た  
だひたすら超越するだけの神、ただ絶対性に安住する超越者は、真  
の絶対的者ではない。  
D'型・・・成仏したが、衆生経度のために来迎する仏。死復活を哲学的  
概念としてもつ神。
5. E型・・・超越者でありながら、人間の世界に到来する神。死復活によっ  
て、自己を啓示する父、子、聖霊の神。trinitarian, 三一神。

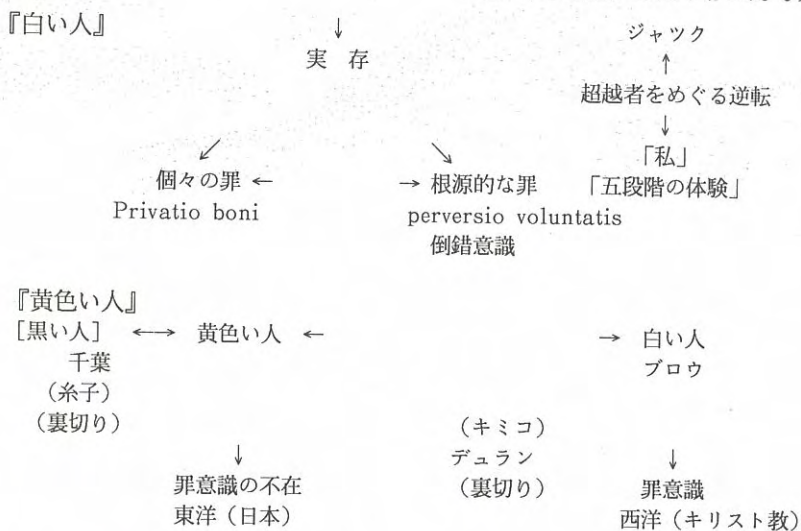
### (Ⅲ) 遠藤周作における神の問題

1. 多神論と一神論——『神々と神と』（『四季』1947年、12月号）



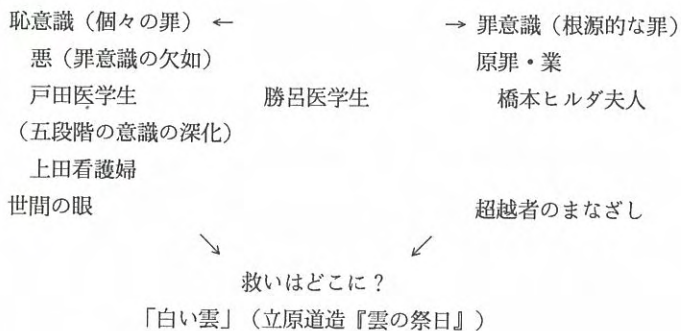


2. 日本人と西洋人——『白い人』（『近代文学』1955年、5月号、芥川賞）と『黄色い人』（『群像』1955年、11月号）



3. 恥意識と罪意識——『海と毒薬』  
（『文学界』1957年6月号から連載、1958年刊行）

『海と毒薬』



#### 4. 裏切りと赦し——『沈黙』（1966年3月刊）

キチジロー

裏切りのテーマ——

（ペテロの裏切り）

神の沈黙

（井上筑後守：泥沼論）

ロドリゴ

フェレイラ

赦しのテーマ

（イエス伝との対比）

踏絵のキリスト  
救済者の到来



#### 5. 現代のイエス像——『死海のほとり』（1973年6月刊）

『イエスの生涯』（1973年10月刊）

『キリストの誕生』（1978年9月刊）

#### 6. 罪の赦しの現実——

『悲しみの歌』（『海と毒薬』の続編）

（『死なない方法』、『週間新潮』1976年1月1日～9月2日連載、

1977年1月刊）

『女の一生』

第一部（朝日新聞、1980年11月1日～1981年6月1日連載、1977年1月刊）

第二部（朝日新聞、1981年7月3日～1982年2月7日連載、1982年3月刊）

### （Ⅳ）むすび

同伴者イエス、真の神は到来する神（ピリピ2：6－11）。

人間となり、十字架上に死し、復活して生きて働く神。

「人間の神喪失はありうるが、和解の言葉によれば、神の人間喪失はない。」

（K. バルト『和解論』）。

## 北星学園女子短期大学40年のあゆみ

- 1949（昭24）年4月 新制高等学校に英語専攻科（2年制）を設置
- 1951（昭26）年3月 英語専攻科第1期生卒業式  
3月 女子短期大学の設立認可  
4月 開学 新入生54名 初代学長エバンス女史  
11月 第2代学長 安孫子孝次氏就任
- 1952（昭27）年3月 英語専攻科第2期生卒業式
- 1953（昭28）年3月 第1回卒業式 卒業生（英文科48名）  
10月 校舎1号館工事定礎式
- 1954（昭29）年4月 家政科増設 1号館竣工
- 1955（昭30）年4月 短大に幼稚園教諭養成所附設  
7月 校舎2号館工事定礎式  
10月 2号館竣工
- 1956（昭31）年3月 第4回卒業式 英文科29名、家政科（第1回）84名  
9月 第3代学長に時任正夫氏就任
- 1958（昭33）年4月 英文科に専攻科設置
- 1960（昭35）年4月 第4代学長に手島寅雄氏就任
- 1965（昭40）年12月 家政科に家庭経済課程を新設
- 1966（昭41）年4月 家政科2年目より食物コース、被服コース、家庭経済コースを  
新設  
4月 幼稚園教諭養成所を短大附設保育専門学校と改称  
6月 短大新校舎第1期工事起工式
- 1968（昭43）年2月 現在地に鉄筋4階、地下1階の新校舎第1期工事完成  
4月 英文科40名から80名、家政科80名から120名に定員変更
- 1969（昭44）年4月 家政科2年生に選択ゼミナール制を新設
- 1971（昭46）年4月 第5代学長に留岡清男氏就任
- 1973（昭48）年3月 第6代学長に木村謙二氏就任
- 1975（昭50）年4月 英文科を英文学科・家政科を家政学科に名称変更
- 1976（昭51）年3月 第22回卒業式 英文学科130名、家政学科211名、卒業生総数  
英文学科1,936名、家政学科3,161名、計5,097名



- 10月 創立25周年記念祝典、同シンポジウム
- 1977（昭52）年12月 将来計画検討委員会発足
- 1981（昭56）年1月 同窓会 エバンス賞制定
- 1982（昭57）年4月 家政学科被服コースを生活デザインコースに変更
- 9月 校舎建築第2期工事完成、公開講座開始
- 1985（昭60）年1月 南4条、南11条校地を取得
- 4月 第7代学長に塩谷饒氏就任
- 7月 外国人留学生、社会人学生取扱要領を制定
- 1986（昭61）年4月 英文学科・家政学科入学定員変更（英文学科80名、定員120名、家政学科120名、定員180名）
- 7月 南4条校地テニスコート完工式
- 1987（昭62）年1月 海外帰国子女受入れ制度制定
- 2月 北星大学編入推薦制度制定
- 1988（昭63）年4月 家政学科を生活教養学科に科名変更 2年目コースより食・栄養コース、デザインコース、経済教養コース、生活情報コースに変更
- 5月 米国ゴーシェン大学と姉妹提携
- 1989（平1）年4月 英文学科・生活教養学科臨時定員増（英文科30名、定員150名、生活教養学科40名、定員220名）
- 6月 校舎建築第3期工事完成
- 1990（平2）年4月 英文学科海外研修派遣留学生制度制定
- 8月 イースタン・メノナイト大学（アメリカ）ランカスタ大学（イギリス）に学生派遣（6名）
- 1991（平3）年3月 第39回卒業式 英文学科185名 生活教養学科246名 卒業生総数 英文学科4,142名 生活教養学科（家政学科含む）6,446名 計10,588名
- 4月 英文学科・生活教養学科臨時定員増（英文学科20名、定員170名、生活教養学科30名、定員250名）
- 8月 マラスピナ大学（カナダ）、イースタン・メノナイト大学、ワシタ・バプテスト大学（アメリカ）、ランカスタ大学（イギリス）に学生派遣（21名）
- 11月 開学40周年記念特別講演会、記念式典、祝賀会